カトリック高松教区報

２０２２年５月１５日（第２０７号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.jp
WEB　http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉

はじめのころ、わたしは人を回心させなければならないと思っていました。そうこうするうちに、私の使命は、愛することだと分かりました。

ようこそ四国へ

復活祭後に着任された森神父、オソリオ神父です。よろしくお願いします。

井の中の蛙大海を知らず

森　一幸

この度、桜町教会を担当させていただくことになりました森一幸です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

高松教区に来るまでは、千葉県の東端にある銚子教会を担当していました。銚子教会は小規模な教会で、信者の多くは外国籍の方です。フィリピン、ベトナム、韓国、インドネシアなどで、日本人は少数です。

神学生時代は規模の大きい教会での実習がほとんどで、神父になった最初の教会も同じでした。その後、銚子教会で初めて主任司祭という立場になりました。この銚子教会で、それまで培ってきた教会に対する固定観念が覆りました。タイトルにしました『井の中の蛙大海を知らず』を経験したのです。

レストランで譬えると、リーダーである料理長がいて、材料を仕込む人もいる。各テーブルへ配膳するホールスタッフがいて、会計を担当する人もいる。かつて経験してきた教会のイメージですが、銚子教会ではワン・オペレーションが中心です。来られる方も多国籍。日本人の好む料理を提供するだけでは通用しませんでした。おかげでゼロからスタートするという経験をさせていただきました。ゼロからスタートというのは固定観念を捨てて、どのようなレストランにするべきかを根本から考える、ということです。

日本のカトリック教会のほとんどは小規模な教会だと思います。小規模な教会が大海でしょう。それでも教会が存在すべき意義は何なのか。それは、自分自身が存在する意味に通じます。キリスト信者一人ひとりが教会を現わしているからです。

今回、高松教区への派遣という機会をいただきました。わたし自身が再び大海とするゼロからのスタートという機会です。どのような貢献ができるかを深めていきながら歩めたらと願っています。改めまして、どうぞ、よろしくお願いいたします。

心の故郷・四国に帰って

アントニオ・オソリオ・フェルナンデス

高松教区の皆さん、はじめまして！また前から知り合っている皆様、お久しぶりです！アントニオ・オソリオ・フェルナンデス神父と申します。宜しくお願い申し上げます。私は、１９６１年にスペインで生まれ育ち、お導きを頂いて日本で司祭職に与ることになりました。しばらくフランスで働いておりましたが、今回12年振りに日本に戻りました。これまでの歩みを少しご紹介し、私の自己紹介を致します。

１９９０年、初めて日本に来ました。1年間日本語の勉強の後、哲学と神学の勉強が始まりました。１９９９年に叙階の恵みに与り、1年間は新居浜教会で奉仕させて頂き、大分の小教区のお手伝いに時々伺う中でご縁あってそのまま宮崎の小教区と幼稚園で6年間働かせて頂くことになりました。そして、大分の玖珠の小教区と幼稚園で2年間働きました。その後、フランスに派遣されて、神学院の副院長と小教区の担当をしました。神学院での務めを通して神学生達との関わりを頂き、小教区においては、他国にルーツのある方々との出会いを頂き彼らの信仰に触れました。

フランスでの奉仕も本当に豊かな体験となりましたが、いつも心の内では「日本に戻りたい」と思い続けていました。これまでの人生は、今振り返ると、私の計画ではありませんでした。全ては、神様の導きだったと思います。この度、願いが聞き届けられ、心の故郷である四国に帰って参りました。本当に心から喜んでおります。高山神父様からバトンを受け、丸亀・善通寺の小教区と幼稚園を担当させて頂くこととなりました。皆さんと一緒に信仰の道を歩みたいと思います。よろしくお願い申し上げます。いつも神様のみ心のままに進めますように！

宇和島教会　百周年記念に寄せて

宇和島教会百周年については、3月27日のカトリック新聞紙上でも動画配信を紹介していますが、本紙前号で案内した宇和島教会からの寄稿です。

豊かな実りの時を迎えたい

宇和島教会宣教司牧評議会
議長　堀内伊作

～耕した人、茨を刈った人、水を遣り続けた人々への尽きせぬ感謝を胸に～

２０２１年11月20日、カトリック宇和島教会百周年記念ミサが高松教区諏訪榮治郎司教およびドミニコ会司祭団・申繁時宇和島教会担当司祭の共同司式のもと厳かに挙行されました。宇和島市は四国西南部に位置する、人口７万余の真珠養殖と漁業、柑橘栽培を生業とする小都市ですが、19世紀末からパリ外国宣教会の神父方による熱心な宣教活動があり、それを引き継いだドミニコ会の創立七〇〇周年記念行事の一環として１９２１年11月1日に現在の地に教会が建てられました。

教会のこれまでの歩みを顧みる時、「種蒔く人」（マタイ13・1～）のたとえが思い浮かびます。主のみことばが人々の心に根を下ろすよう耕して下さった人、茨がはびこらないよう重荷を取り除いて下さった人、そして思いが枯れてしまわないよう絶えず水を遣り続けた人々の熱心さがあって、今日も宇和島の地で主の良き知らせが述べ伝えられています。百年もの間、この働きを祝福して下さった主の計らいに心から感謝し、豊かな実りの時を迎えたいと願っています。

一〇〇周年の恵みに浴して

宇和島教会典礼担当
後藤敏彦

今年まで17年間、宇和島教会の典礼に奉仕させていただき、百周年記念行事に出会えたことは感謝です。折しも、コロナ禍の多忙さで不在がちな議長や司祭の心配に寄り添うことは、恩返しの気持ちでの奉仕でした。申神父が大阪教区から着任され、百周年の準備では大変ご苦労をされました。細々と信者さんの代わりにミサの式次第【記念ミサ典礼については八幡浜教会・清水裕子議長に全面的に協力と尽力して頂けたこと事を感謝いたします。申神父より】や会議の準備に翻弄されておられる姿に接し、ご一緒にこの難題を共にできたことは、この先に宇和島教会を後にするとき、大きな恵みであった、と感謝のうちにいます。特に記念講演や祝賀会が中止の中で、記念誌が注視され、実行委員でもない当方や関京子氏、中平寵子氏と共にできたのは、キリストとともに共同体を感じる時間でした。

私は、74歳になりますが、現在も名古屋教区緑ヶ丘教会に所属しています。老後の田舎暮らしを描いていたので、この宇和島教会の素敵な姿にひかれ、宇和島市郊外の農村に居住して、晴耕雨読の生活を送っています。宇和島教会まで1時間程かかりますが、四季の自然の移ろいがあり心安らぐ時間です。早期退職を機に移住したので、しばらくは退職前に帰天した妻の骨壺を支えに生活しましたが、それなりに孤独も感じました。ハーブを育てて信者の方々に配布したり、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼に3回も出かけたり、豊かな時間を頂き、百周年記念ミサで新しい心を得ることができ、一つの峠を越えることができました。神様の配意に感謝です。最後の奉仕と思っての百周年の動画配信を行いました。ご視聴いただければ幸いです。QRコードを読み取りご覧ください。

宇和島教会の百周年は、このような内外の人々が主の名の下で協働するというメッセージを送りました。無名の人々の奉献がカトリックの信仰の姿といえます。読者の皆様と共に次の百年に思いをしたい。

１００周年記念ミサ
動画配信

はばたき

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちに大きな変化をもたらしました。

最近、私は総合病院を受診しました。そこで見慣れた光景ですが、深く考えさせられることに出会いました。それは、案内される設定に従って、老若男女例外なく、感染防止対策を整然と遵守する光景です。これは、病院だからではなく、今やどこでも見かけられる光景です。

私たちの日常生活にコロナ禍が課題になって2年余りにすぎません。しかし、生活は大きく変わりました。私が実感しました病院での光景は、いのちを守るための行動です。一人ひとりが自分のいのちを守るための行動です。そして、自分のいのちを守るためには、他人のいのちを尊重しなくてはならないことを認識した行動です。他人から指揮されなくても、日常的に実践できる行動です。

ある日、テレビをつけると、「ロシア軍ウクライナ侵攻」と映りました。そして、ひときわアップで幼い男児。「知っている。戦争が始まったのだ。死にたくない」。溢れる涙を満面にため、国外に逃避する長蛇の列に、重い足どりで加わりました。

私たちは第二次世界大戦で、世界初の原爆被爆を体験した国民です。戦争の苦しみは二度と求めません。私たちは平和を求めています。しかし、現状は程遠い大きな課題に直面しています。

今こそ、私たちは立ち上がらなければなりません。じっとしていられない気持ちです。しかし、今、何ができるだろうかと考えると答えが出てきません。あまりにも大きな課題に直面しています。皆さま、どうぞお導き下さい。

私たちは主の導きを求めています。大切な隣人の一人ひとりのいのちが守られますように。そのために、私たちが働くことができますように道をお示しくださいますように。

地区・ブロックの話題

～愛媛地区～
西条教会の新しいスタートにあたり

西条教会は、教会建築後60年が経ち老朽化が進んだため、名残惜しいですが苦楽を共に歩んでくれた教会の取り壊しを決定し21年の10月から新しい聖堂の建築を進めてまいりました。このたび、新しい教会が完成し、3月20日に諏訪司教様と小山助祭様に西条教会に来ていただくことができ、諏訪司教様に祝別をしていただきました。コロナ渦でもあり祝別のあとのパーティは開催できませんでしたが、天候にも恵まれて司教様に祝別していただくことが出来て最高の一日となりました。

新しい教会は、倉庫として使用していた信徒会館の1階部分を改装して聖堂にリフォームしました。これまで教会で使用していたものは、なるべく新しい教会に持っていきたいということで椅子はペイントしてリニューアル、祭壇は、新居浜教会から譲っていただいたものを使用、司祭椅子、聖櫃、オルガン、朗読台、十字架の道行きなどは、移動してそのまま使用することにしました。荷物の移動は、主日のミサのあと信者皆で協力して2回に分けて移動させました。そのおかげで教会はぴかぴかに新しくなりましたが、聖堂に入ると新旧が混じりあった懐かしい感じがする教会とすることができました。また、新しい教会は、前よりも天井が低くなり、少し狭くなったおかげで、フェルナンド神父様との距離がぐっと近くなり、今まで以上に神父様のミサのお話を身近に感じられるようになりました。なお、これまで教会の建っていた跡地は、駐車場として使用することになり、教会に車を駐車するときに、そういえば、ここに聖堂が、ここに祭壇が・・・あったんだなと思い出しながら車を止めているような状況です。

西条教会は、主日のミサに参加する人数は15人前後でこじんまりとした多様性に富んだ教会です。近年信者の国籍の割合も大きく変化してきており、新しい教会のスタートにあたり今まで以上に多様性を意識した教会の運営をしていかないといけないと感じています。現状は、コロナ禍でもあり、いろいろな行事、イベントを制限しないといけない状況ですが、私たちは新しい教会でフェルナンド神父様と一緒に日本人・外国人全員参加の多様性に富んだ楽しい教会運営をしていきたいと思っています。

新しい西条教会

これまでの西条教会（左上）
3月20日、諏訪司教様に新しい教会を祝別していただきました。

～徳島地区～
Zoomで聖書の分かち合い

野口佳津江

昨年の9月21日から、ブラザー八木による聖書の分かち合いが始まりました。隔週火曜日、19時30分～21時に行われています。「ルカによる福音書」を初めから読んでいます。

Web会議サービスアプリ「Zoom」を使用して行われています。Zoomとは、パソコンやスマートフォンからインターネットを介して会議をすることのできるサービスです。コロナ下において広く使われるようになりました。パソコンやスマートフォンに内蔵のカメラとマイクから画像と音声を常時送受信しながら複数の場所から同時に、インターネット上で行われる分かち合いの会に参加ができます。

会の流れ・・・

パソコンもしくはスマートフォンをWiFiに接続してからミーティングルームにアクセスします。アクセスのためのコードは事前にメールで送られてきており、ワンクリックで簡単にアクセスできます。会議中の画面には、参加者全員の顔が表示され、発言者が自動的に大きく映るようになっています。

「聖霊の続唱」を唱えてから本日の福音書を音読し、ドラマ仕立てになっている動画を見ます。その後注解書を輪読し、内容を深めていきます。全部を読み終わったら、順番に感想を述べます。最後に「主の祈り神様バージョン」を唱え終了となります。

参加者は毎回7～8人ほどです。夜に開催され自宅から参加できるので仕事をしている方でも参加しやすくなっています。

感想・・・

私は聖書の勉強会には初参加で、解説してもらいながら読んで行くのが非常にわかりやすく感じました。また、ブラザーのお話や、参加者の方の感想を聞き、自分では気づかない視点からの見方に気づくことができました。一方で自分の話を受け止めながら聞いていただけるのが心地よく感じます。

これから聖書の人物のどんな行動を知り、その思いに迫れるか。またこの分かち合いを通して自分がどのように変容していけるのか、楽しみにしながら続けて参加したいです。

シノドスの分かち合い

高田芙美

この度、教皇さまの呼びかけで2021年の秋から2023年の秋に向けて世界中の教会がシノドスの歩みを始めました。シノドスとは「ともに歩む」という意味なので、シノドス的教会になるために、すべての信徒がともに歩みながらどんな教会であればいいのか、どのように宣教すればいいのか、御父が現代において私たちに求めておられることを見極めるために、みんなで祈りながら、分かち合いながら新しい流れを作っていこうという招きです。

徳島教会はシノドスの準備として先ず、「第16回シノドスに向けて」の諏訪司教様の動画を拝見し、『10の質問』を配布しました。その後、待降節の黙想会としてブラザー八木からシノドスに向けての準備についてお話していただきました。分かち合いは2つのグループに分かれて3回開かれ（約18名参加）、英語のグループは2回行われ（9名参加）、ベトナムグループは都合で出来ませんでした。分かち合いに参加できなかった方には四旬節の手紙の中で、『10の質問』の他、諏訪司教様のメッセージの動画を紹介し郵送しました。分かち合いはミサの参加者の2割程度でした。

たくさんの貴重なご意見やご提案をいただきましたが、シノドスは一人ひとりの信仰の振り返り、教会の在り方の見直しを求めているので、どんな困難な問題があっても教会はイエス様の福音によって乗り越えていく他はないと思われます。福音とは何かに立ち返り、2000年前にイエス様の伝えた福音に向かい、学び、悩み、祈りながらそこに向かって巡礼の旅をしていく。それが信仰生活ではないでしょうか。今回私たちは改めてその入り口に立たせていただいたという思いがしています。

最後に分かち合いの中で特に心に響いたことは、「教会は人を魅了することで成長する」という教皇さまのお言葉でした。日本でも一人の聖人が出ることによって計り知れない恵みがいただけることでしょう。そのために一人ひとりの信徒の生き方が問われています。

絆に支えられた2年間

高山　徹

この度、東讃ブロックに異動となりました。丸亀・善通寺の小教区の皆様、幼稚園の皆様、本当にお世話になりました。コロナ禍と共に着任したのが昨日のことのようです。かつてないパンデミックの状況下、社会全体が静まり返っていました。毎日教会や幼稚園も、着任直後は通常化を待たねばなりませんでした。そのような中でも、皆様が色々な配慮を下さり、交流が始まりました。毎朝、祈りとミサを1人で終え、園庭に出向いて走り回りました。幼稚園ではいつも元気を頂きました。また、教会で1人待機する私を気遣って訪問や電話連絡を下さる小教区の方々や町内の方が何人もおられました。先の見えない状況下でも、沢山の励ましを頂きました。

その後も感染拡大は、一時は終息の兆しを見せつつ継続し続けております。ある程度活動が可能になりながら、病者訪問や信仰講座の実施等、小教区の活動を活発に出来なかったのは否めません。コロナ禍が主たる要因ではありますが、工夫次第でもっと出来たかもしれない…反省は尽きません。様々な方々のお見送りもございましたが、やはり最期の訪問等が難しく悔いが残っております。「ソーシャルディスタンス」を取ることが大前提で、ゆっくり交流するのも難しくなりました。

しかしながら、次のようなご助言も頂きました。「神様との関係をしっかり保てば、人との絆もきっと途切れることはない」これは、今後もテーマになると思います。2年間、霊的な生活を自分自身が深めたとは言い難いですが、沢山の恵みや絆を私が頂いたことは間違いありません。丸亀・善通寺の小教区・幼稚園の皆様、そして西讃ブロックの皆様、ありがとうございました！アントニオ・オソリオ神父様にバトンタッチいたします。

東讃ブロックの皆様、特に小豆島教会・番町教会の皆様、高松聖母幼稚園・長尾聖母幼稚園の皆様、よろしくお願い申し上げます。

◇教区スケジュール◇

5月
- 1日（日）復活節第3主日
- 3日（火）憲法記念日
- 4日（水）みどりの日
- 5日（木）こどもの日
- 8日（日）復活節第4主日　世界召命祈願の日
- 10日（火）司牧者懇談会・司祭評議会 10:00～
- 15日（月）復活節第5主日
- 20日（金）田中英吉司教 命日
- 22日（日）復活節第6主日　世界広報の日
- 29日（日）主の昇天

6月
- 5日（日）聖霊降臨の主日
- 12日（日）三位一体の主日
- 14日（火）～15日（水）大阪教会管区司牧者研修会
- 19日（日）キリストの聖体
- 23日（木）洗礼者聖ヨハネの誕生
- 24日（金）イエスのみ心
- 26日（日）年間第13主日　聖ペトロ使徒座への献金
- 28日（火）経済問題評議会10:00～
- 29日（水）責任役員会13:30～ 聖ペトロ 聖パウロ使徒

お詫びと訂正

高松教区報206号4ページの「宇和島教会創立100周年記念ミサ」記事中に「ヨゼフ呉文成神父」としているのは誤りで、正しくは「ヨゼフ郷文成神父」です。お詫びして訂正いたします。